

§はじめに§

本学は1995年より八王子キャンパス計画を着工するとともに、諸教育改革に取り組んで来た。2004年10月に新正門が竣工したことで、9年に亘る八王子キャンパス計画が一段落つくこととなった。

今回の自己点検・評価においては2000～2003年度という期間を取り払い、この9年間の取り組みと将来構想について述べることで本学の施設の状況が伝わるものと考えている。よって他グループとは異なった形での報告とした。

§キャンパス整備の歴史と将来構想§

1. キャンパス整備の歴史



<八王子キャンパスの沿革>

本学八王子キャンパスは、東京都の西部、多摩ニュータウンの最西部に位置する。キャンパス付近は、鑓水と称する地名にあるが、これは山肌から湧き出る水を汲むために竹をヤリ状に切ったものを刺して使ったことに由来するほど水の豊富など、キャンパス内にもかつて湧水がみられ、学生にも親しまれていた。かつてこのあたりには養蚕を主とする農家が谷戸部分に点在し、桑畑と水田と雑木林を背景として長く生活してきた歴史があった。また、キャンパスの北を走る柚木街道や隣接する野猿街道の近辺は、幕末から明治にかけて、八王子に集められた絹を横浜方面に運ぶ交易ルートとして栄えた歴史を持っている。



八王子キャンパス(1969年以前)

この地に1960年、本学は上野毛キャンパスの校地面積を補充するために、八王子校地(現在の八王子キャンパス)を購入して運動場を建設した。購入当時は、多摩ニュータウンの建設が実施される以前で、先見の目を持って事業に着手したことが言えよう。

1968年、文化人類学の権威として国際的に著名な石田英一郎博士が第2代学長に就任した。石田学長は学長就任と同時に本格的な大学改革案の作成に着手し、広く学内に意見を求め、21世紀とい

う新たな時代に対応し得る美術大学とはいかなる理念、学科構成、カリキュラムが望ましいかを検討した結果、八王子キャンパス移転に関するビジョンを発表した。この宣言は「石田ビジョン」として全学生および教職員の支持を得て、1969年多摩ニュータウンの建設が東部地域から開始されたのと時期を同じくして、現在の八王子キャンパスの移転計画が開始された。



八王子キャンパス(1969～72年)

1971年、新設の建築科の新入生を含む1年次生の授業が八王子キャンパスで開始され、1974年には美術学部の移転が完了した。さらに、すでに設置認可を受けていた芸術学科が、内藤頼博第4代学長の時代の1981年に開講し、

石田ビジョンは一応の完成を見た。

そして1994年と1997年には、長年教職員および学生が待望していた校地の拡張が実現することになった。多摩ニュータウン西部地区の整備は東京都によって

漸次進められていたが、八王子キャンパスの西側隣接地35,000㎡の購入が藤谷宣人第5代理事長の4半世紀に及ぶ粘り強い交渉によって1994年に実現した。

これにより、多摩ニュータウン事業の遅れにより停滞していた絵画棟、デザイン棟、彫刻工房棟群、工芸工房棟群、T A Uホールなど、新校舎の建築工事が一挙に再開された。1997年春には、絵画棟、彫刻工房の一部、学生クラブハウスがキャンパス計画第1期として落成し、大学院が八王子キャンパスに移転した。石田ビジョンの初期のプランにあった、美術学部の専門課程と大学院をつなぎ、教育・研究内容を充実する計画が遂に実現することとなった。1998年春には八王子キャンパスで最も大きな建物となるデザイン棟、彫刻工房棟群、工芸工房棟群が完成した。それに続き、テキスタイル棟群、T A



八王子キャンパス(2002年)

Uホール、グリーンホールが完成し、引き続いて2000年11月にはメディアセンターが完成した。

その後2004年3月にはレクチャーホールが、同7月には本部棟が完成した。

また2002年には、多摩ニュータウン計画の最終売却地である本校東側隣接地 17,472 m²の購入が実現した。現在この東エリアには、八王子キャンパスの新正門と新バスターミナルの建設が計画されており、2004年10月完成した。このキャンパス東地区には、

藤谷理事長と第7代学長高橋史郎の将来構想の基となっている、情報化新時代に対応する八王子キャンパスの第3期計画として「新図書館」、「情報デザイン学科」と「芸術学科」が移転し、新たなカリキュラム展開を図る「新学科棟」建設を計画当中である。これらの建設も2007年の3月には完成し、1969年から始まった八王子キャンパスの壮大な計画も38年を掛けて、学生一人当たりの校舎面積が美術系大学では世界的なキャンパスが完成する予定である。



八王子キャンパス(2004年)

2. 新キャンパス計画へ向けたビジョンと運営

<新キャンパス計画のビジョン>

1998 年におこなわれた学内の大幅な改組転換および情報デザイン学科の新設を機に再開された本キャンパス計画は、藤谷理事長の諮問機関として設立された八王子キャンパス建設整備委員会で、藤谷理事長、高橋学長（当時教務部長）を中心として石田構想に続く新しいキャンパス計画のビジョンと運営方法の検討が始められた。

<新キャンパス計画の理念>

本学は、「自由と意力」を持った学生を育て、社会に送り出すことを使命としている。これがキャンパス設計のコンセプトでもある。学生を育てる環境作りとして、多摩の自然の中に創作活動を自由におこなえるアトリエの充実をはかった建築群を建てる。建物内外を問わず芸術やデザインにあふれた環境を計画する。教員や学生間での交流を促す施設を計画する。

また、第3期計画では、21世紀の地球環境問題にも配慮し、積極的に省エネルギー対策をデザインに組み入れ視覚化し、更によりキャンパス環境をめざし国際環境基準である ISO14000 番台の取得も視野に入れデザインと環境の融合をはかる。

<キャンパス計画の設計組織>

本キャンパス計画が始まるにあたり、八王子キャンパス設計室が学内の教員を中心に組織され、学内調整やヒアリングを始め基本設計を行なっている。設計は1期、2期、3期と計画され、2期までの工事が完成し、現在は3期の設計を進めている。各期の実施設計は大手ゼネコンが支援し、現場監理は八王子キャンパス設計室がおこなっている。

<敷地の特徴>

本キャンパスは北を柚木街道に、東を都道に、南を都が新しく建設した遊歩道に、西を国道16号線への抜け道にと四周を囲まれた敷地である。敷地南側には保存緑地も残されている。敷地面積は15,156.41 m²。標高130～160メートルまでの起伏のある典型的な多摩丘陵の一角に位置する。この丘陵のアップダウンを最大限に利用して本キャンパスを計画したことが、大きな特徴である。高さに変化のあることは建築群を躍動させる可能性を含むものである。段を登り、振り返った時の新しい驚き、緩やかな坂を下る時の快感、様々な高低の中にできる自然な溜り場、そこでの教員と学生との語らい、学生たちの談笑...欠点とされてきた坂を魅力あるキャンパスに変えることが、本キャンパス計画に課せられた課題であった。

近年、周囲は多摩ニュータウンの開発で切り開かれ、敷地からは橋本駅や相模原市街が一望できる。橋本駅からは1.6 km、バスで5分の距離にある。敷地内の最も標高のあるところには1969年に建設された共通教育センター（旧本館）が位置し、この建物を取り囲むように各棟が配置されている。敷地へのアプローチは、東側道路に面する新正門からとなる。



スクールバス

<交通アクセス計画>

本キャンパスへは橋本駅、八王子駅からのスクールバスが運行していたが、キャンパスの発展に伴い 2003 年春からは橋本駅、南大沢駅、八王子駅から 1 日 110 便の路線バスが運行し通勤通学を支援している。民間バスではあるが、大学のイメージアップのためスクールカラーのブルーのラッピングバスも運行されている。

2004 年 10 月からは新正門の完成に伴い、本キャンパス内の敷地を一部バスレーン専用として提供し、各駅と多摩美術大学との路線バスが充実された。



配置計画ゾーン図

<配置計画>

本キャンパスは、1969 年に建設されたレクチャーゾーン-----共通教育センター（旧本館）を丘の頂上に残し、その周りを取り囲むようにセンターゾーン、絵画ゾーン、デザインゾーン、工房ゾーン、大教室ゾーン、メディアテークゾーン、サービスゾーン、新学科ゾーンそれにスポーツゾーンの 10 のゾーンから構成されている。各学科は創作作業の形態や素材に応じグルーピングをして、独特のゾーン構成となっている。

<敷地内道路計画>

本キャンパス正面玄関として、新正門から西へまっすぐに伸びる幅 10 m のクスノキ並木を設けた。この並木道は新しい本キャンパスのシンボルであると同時に、多摩美の理念である「自由と意力」現す象徴の木でもある。キャンパス内の絵画北棟へはこの並木道を通してアプローチする。この並木道は西端で、本キャンパス西側外周路である「桜通り」につながる。桜通りは本学の同窓会である「校友会」が毎年桜の苗を寄贈し、これによって整えられた外周路である。

本キャンパス内には、もう一本、東側外周道路として「柳通り」が配置されている。この通りは名前のごとく柳を街路樹とする勾配 3 % のゆったりとした並木道で、学生の通学路として計画されている。



新正門のクスノキ並木

新バス停を降りた学生は、この柳通りを通して、新本部棟で学内のインフォメーションを得た後、新図書館や新校舎、メディアセンターを通り修景池と安らぎの森をぬけ、中央広場に出ることができる。この桜通りと柳通りを二分して、中央には「中央り」が配置されている。キャンパス内の道路は、いずれも作品の搬入搬出を考慮して歩車兼用としている。

<広場計画>

学生たちのコミュニケーションがうまくとれる施設を計画することは、キャンパス計画の中でも重要なテーマである。通学路、並木道、木陰、散策路その他の各所に広場、ポケットパーク等を設け、それらが連続しながら変化のあるネットワークを構成するように配置している。エントランス広場、彫刻の森、癒しの広場、中央広場、インターネット広場、イベント広場などを工夫している。それぞれの施設の性格からも、石、木、砂、あるいは花、水等を用い、またそれぞれの空間には、ベンチ、東屋、藤棚、ガレリア、修景池、水の流れる彫刻等を設け、素材、形態、色彩の構成を学ぶと共に学生の表現、パフォーマンスの場ともなるようにする。

<キャンパス全体のアート計画>



関根伸夫の彫刻作品

本キャンパスの外部には、新正門北側には関根伸夫の彫刻作品、本部棟前には上野毛時代の歴史を刻む建畠覚造の彫刻、メディアセンター前には五十嵐威暢の彫刻作品などが配置されている。いずれも本大学の教授陣や本学に関係した作家たちの手によるものである。また同門南側に位置する彫刻の森にも著名な作家の作品を点在させ、キャンパス全体を作品で満たすことで、キャンパスすべてを生きた創造・教育の場と

する計画である。また、建物内にも本部棟玄関ホールの中村錦平の作品をはじめ、各作家にスペースを提供し作品を設置している。



八王子キャンパスの雑木林

<緑化計画>

昔、本キャンパスの敷地は多摩地区特有のクヌギ、コナラ、ケヤキなどの繁った雑木林であった。現在の修景池付近では蛍が飛び交う光景が見られた。この敷地に本キャンパスが計画され、隣接地まで多摩ニュータウンの開発が進められ、多くの木が切られ雑木林が失われた。キャンパス計画を進めるにあたっては、多摩の雑木林の再生を最優先に考え、旧グラウンド脇のイチヨウ並木と八重桜並木、ほか何本かの植栽を各所に

移植した。第1期工事当時敷地に残った林は、絵画棟と共通教育センター間の斜面の雑木林と、絵画棟の北面の竹林にすぎなかったが、その後正門前のクスノキ並木、東外周道路の柳通り、西外周道路の桜通り等が整備され、今後は修景池北側に大きな安らぎの森を計画中である。キャンパス計画第3期が完成する2007年には、多摩の雑木林に囲まれたキャンパスが再現する予定である。



修景池

<修景池計画>

テキスタイル棟と芸術学科棟にはさまれた池は、周辺の雨水の調整池でもあり、また八王子キャンパスの憩いの場でもある。調整池としては最大1000トンまでの貯水能力を持ち、下方の大栗川に流れ込む水量の調節をしている。また、修景池周辺には、もともと八王子キャンパス内に植えられていた木も移植されており、多種多様な植物は、四季折々の変化が感じられるよう配置されている。

新学科棟の建設に伴い、現芸術学科棟は解体撤去され、同地域の緑化を計画している。2007年には豊かな外部空間の創造、水辺空間による憩いの場、昆虫・水鳥・魚が棲めるビオトープとして学内のサンクチュアリー空間をめざしている。



自転車・バイク駐輪場

< 駐車駐輪場計画 >

本キャンパスは、各棟に分散して自動車駐車場が配置されている。これは、各学科棟への作品搬入を容易にするためである。キャンパス内への教職員の自動車乗り入れは制限がないが、学生は作品搬入時に限り特別許可されている。昨今のバイク通学の増加を考慮し、学生の安全をはかるために柚木街道沿いに教職員ならびに学生が利用可能な駐車場を第3期で設置する予定である。

バイクの駐車に関しては、現行

通り柚木街道沿い東北角の窪地とするが、上記の自動車用駐車場の増設によって、バイク利用者が減ることが予測される。自転車の駐輪に関しては、バイクと同じく柚木街道沿い東北角の窪地と、東道路の東南の角地を整備してこの用地に充てる。

3. 各種建物施設



コンクリート打ち放しの校舎（彫刻棟）

< デザインコード >

本キャンパスでは、多摩丘陵の雑木林の中に佇みながら、絵の具箱を開けたように各所にデザインやアートの広がりを眺め、活動できるキャンパスをめざしている。そのような林の中に光を受けて建つ建築群として、主張しすぎない素材として鉄筋コンクリート化粧打ち放しを選び建築を計画している。建物が主役ではなくそこで行われる創作活動やコミュニケーションが主役となる。

□□センターゾーン□□

本部機能と事務機能を持つ本部棟と新正門周りからなる。



本部棟

<本部棟>

本キャンパスの新正門脇に多摩美術大学の正面玄関的役割を持って配置されている。理事長室、学長室、理事室等の法人運営ゾーンと、総務課、教務課、学務課、学生課、就職課等の学生支援ゾーン、大会議室、教職員ラウンジ等の教職員支援ゾーンの3ゾーンが、中庭を介して構成されている。東北側からの池越しにアプローチをする。外部からの訪問者や学生は、この棟でインフォメーションや学内情報を得る。

<新正門>

本キャンパスは、第2期の完成と共に東通り沿いに新正門が完成した。ここには学内への進入をチェックする機能を持った守衛所を設けた。ここでは同機能の他にプラズマのモニターを設け、学内の案内情報等を学生に提供する。また同所のゲートでは、非接触型カードによる入構管理を行い教職員の在・不在を確認することができる。





新正門北側のバス停

<バス停>

本キャンパス新正門の北側には、同敷地を半公道的に扱い、路線バスを導入させたバス停を設けた。



彫刻の森

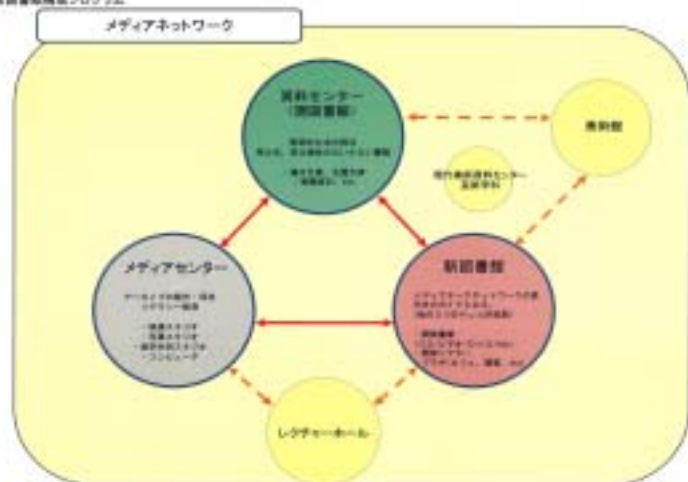
<彫刻の森>

本キャンパス新正門脇に広がる彫刻の森である。クスノキ並木道を挟んで北側は関根伸夫の彫刻が象徴的な芝の広場、南側は多摩の雑木林の中に彫刻が点在する散策路を持った広場である。

□□メディアテークゾーン□□

本キャンパスでは新図書館（2007年3月竣工予定）、メディアセンター、資料センター（2007年12月竣工予定・旧図書館）、レクチャーホールの4つをまとめてメディアテークと称し、学内の新しい情報メディアのシンクタンクと位置づけている。「本」「紙」を媒体とした知識の吸収を主にした「新図書館」に対し、「情報」「インターネット」「メディア」の制作を主とした「メディアセンター」、更に「物」「触れる」こと

新図書館機能配置図



メディアテークの模式図

を通して研究する「資料センター」、「AV」を中心とした講義をおこなう「レクチャーホール」の4つの施設が、互いにネットワークを組み、不足を補完することで、他大学や研究機関に類を見ない美術、メディアの情報基地となる予定である。



計画中の新図書館模型

<新図書館>

本キャンパスの新正門脇の「彫刻の森」とけ込むかたちで、大学のシンボルとなる新図書館が、世界的に活躍する建築家で本学客員教授の伊東豊雄氏の手で現在基本設計が進行中で、これは2007年3月に竣工を予定している。

現図書館の蔵書12万冊に対し、30年後の30万冊の収蔵数を見込んでいる。デザインとアートの融合を図り、美大の特徴である美術書やデザイン関係、グラフィック

関係、展覧会カタログを中心に全開架をめざしている。書架と閲覧席を混在させ、全館が書庫でもあり閲覧室でもある。敷地の微妙な高低差を巧みに利用した図書館内にはカフェやフォーラムを配置し、本とデジタルの融合と共生を図り、イベント展示や授業を行うこともできる。学内の教員や学生、更に学外にも開かれた図書館機能となる予定で、デジタルアーカイブの機能も充実させた計画となっている。



メディアセンター

<メディアセンター>

メディアセンターは、来るべき時代のアートとデザインの可能性を追求し、人の創造力をどう現代に生かしてゆくかの思想実験の場であり、新しいアート&デザイン教育の中核となる研究・開発・教育の全学共通の横断型施設である。

施設はコンピュータリテラシー教育、コンピュータ編集室、メディア編集室、写真スタジオ、多目的スタジオ、産学共同室等からなる。今後の美術大学にとって最

重要課題であるデジタルアーカイブの作成・編集はメディアセンターで行なわれる。



現図書館

<資料センター（旧図書館）>

現在の図書館は新図書館の開館（2007年3月）と共に、資料センターに改装される予定である。資料センターはデザイン界のリーダーで本学の教授でもあった杉浦非水の資料ほか、瀧口修造文庫、北園克衛文庫、今井兼次作品資料、安斎重男現代美術資料をはじめ、各方面の著名人の資料の多摩美コレクションや文様研究所の収蔵品を整理の上、保管し展示研究をおこなう予定である。



レクチャーホールのホワイエ

<レクチャーホール>

本レクチャーホールは、300人の大々教室、200人の大教室、100人の中教室、一般教室群からなる全学科共通の複合施設である。大々、大各教室は大型プロジェクターを設置した階段教室でAV授業に使用される。中教室はU字型の階段教室で、中央に立体作品をプレゼンテーションできる他に例を見ない美術大学ならではの教室である。各教室の前にはガラス屋根のホワイエがあり、学生のコミュニケーションがはかれる

るように計画している。

□□福利厚生施設□□



グリーンホール（食堂棟）

<グリーンホール（食堂棟）>

キャンパス内に2カ所ある食堂棟の一つである。学生席300席と教職員専用ファカルティーとして60席を有している。その他に売店と画材店を併設している



TAUホール（多目的ホール）

<TAUホール（多目的ホール）>

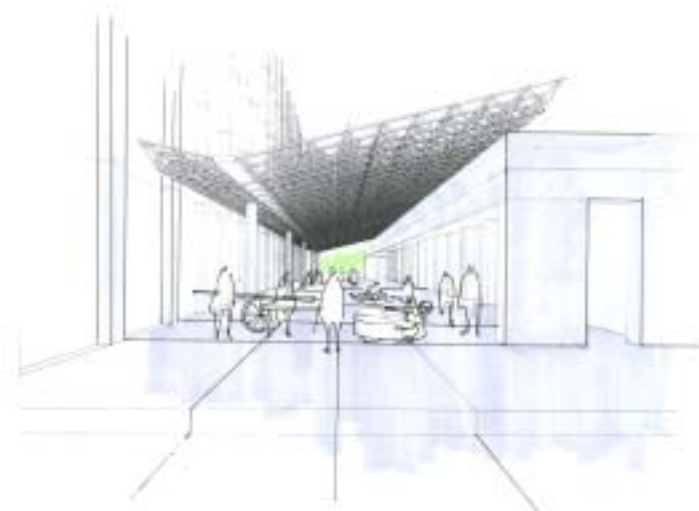
室内体育館の機能と、入学式・卒業式のセレモニーに利用する。



計画中の第2工作工房スケッチ

<第2工作工房>

デザイン棟に付属した工房の計画である。



計画中の工作工房増築スケッチ

<工作工房増築>

デザイン棟に付属した工房の増築計画である。



計画中の自由工作工房スケッチ

<自由工作工房>

共通施設の一つとして、自由工作工房の計画がある。この施設は各学科の学生が利用申告書を提出することによってスペースを借りることができる。スペースは4メートル×4メートルを1ユニットとして、課題にかかわらず4ユニットまで利用することができる。

4. 各学科の構成



ギャラリー（絵画東棟と彫刻棟）

<各学科棟の特徴>

現存の各学科棟は幾つかの学科、幾つかの専攻または幾つかのコースが集まって構成されている。これらの棟にはエントランス部分にギャラリーを設け、各学科の展示等を行うことで、各学科間の交流を図ることを目標としている。各棟は実習スペースを最優先に確保し、冷房設備を完備している。

また、各教員の研究室は一人当たり 15 m²均等としている。



絵画北棟

<絵画北棟>

日本画、油画、版画の各専攻をまとめて絵画北棟として設計した。高低差の激しい敷地の欠点を長所とするように、前庭は傾斜地に雑木林がゆるやかに続き、その中を数段上っては踊場、また数段上って踊り場という川の流れのよどみのように踊場を配置したアプローチとなっている。本キャンパスの中で唯一残った北斜面の雑木林と、建物と道路とを一体化することを最重点として計画

した。平面形は通風、自然喚気ということを最優先とし、片側廊下、中庭、そして雑木林との一体化を配慮した。日本画専攻と展示室は床暖房を設けた。



絵画棟

< 絵画棟 >

1981年に建設した絵画棟は、油画専攻が使用している。同棟には他に200席を有する食堂が設けられている。



デザイン棟

< デザイン棟 >

グラフィックデザイン学科、生産デザイン学科、環境デザイン学科、情報デザイン学科からなる本キャンパスの中で最も大きな建物である。デザイン系各学科の交流を深める目的から、1、2階を吹き抜いた大きな展示ホールを中心とした機能的な建築である。工作工房を別棟に持ち、実習を兼ねたデザイン教育の重視を建築に反映している。八王子キャンパスの一つのシンボルである銀杏・桜並木に平行に配置され、中央広

場を前面に、学生クラブ棟、グラウンドを背面にもつ、文字通りキャンパスの中心でシンボリックな建築である。



彫刻棟群

<彫刻工房群>

木彫、石彫、金属、諸材料、塑像棟が、理念の統一を守りつつ、複雑な機能をもつそれぞれの工房を、独立性と連帯性の両立というテーマでまとめて設計した。単調になりがちな工房群を独自の使い方を分析の上、各々に空間を与えながら構成した空間である。各棟の屋根の架構は、その工房の使用材料に呼応したかたちで建築材料が選択されデザインされている。



工芸工房群

<工芸工房群>

ガラス、金属、陶棟が彫刻工房群と同じように、理念の統一を守りつつ、複雑な機能をもつそれぞれの工房を、独立性と連帯性の両立というテーマでまとめて設計した。ガラスと陶の釜を中央広場に面して設け、学生たちの創造の現場自体を展示空間としてデザインした。



テキスタイル工房群

<テキスタイル工房群>

中央広場にエントランスが面し、修景池に工房を面したテキスタイルの工房群である。彫刻棟、工芸棟と同じく理念の統一をはかりながら、デザインとアートの2コースのカリキュラムを内包するアトリエ群からなる複合施設である。

□□新校舎ゾーン□□



計画中の新校舎模型

<新校舎>

情報デザイン学科のアートコースとデザインコース、芸術学科、および共通施設のメディア武道館から構成されている。情報デザイン学科はメディアとアートの共生をしながら、各々が芸術学科と所々で交流をもてる建物として計画中である。2007年完成予定。

<軽食&学生支援ショップ>

東ゾーンの柳通り沿いに軽食と学生支援施設を設けた。学内には2つの食堂があるが、これらに競合しない形で、1階に軽食を中心としたカフェテリアを、2階には学生支援ショップを設けている。ここでは学生は軽食をとったり学生同士の談話に花を咲かせたり、ショップでコミュニケーションをとることができる。

□□リサーチゾーン□□



共通教育センター

<共通教育センター>

1968年に建設された本館を改修し、全学科の基礎教育を受け持つ共通教育、大学院の教室、ゼミ室、研究室からなる施設である。

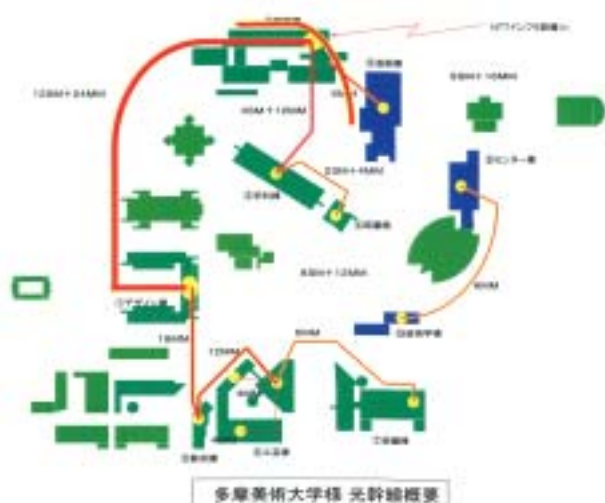


棟名サイン（TAUホール）

<サイン計画>

アートとデザインを専門とする美術大学にあって、キャンパス内のサイン計画も重要な要素である。キャンパス計画に際しては、学内にUI委員会を立ち上げ、サイン計画を綿密に練り、各所に設置している。

5．情報システム



光幹線概要図

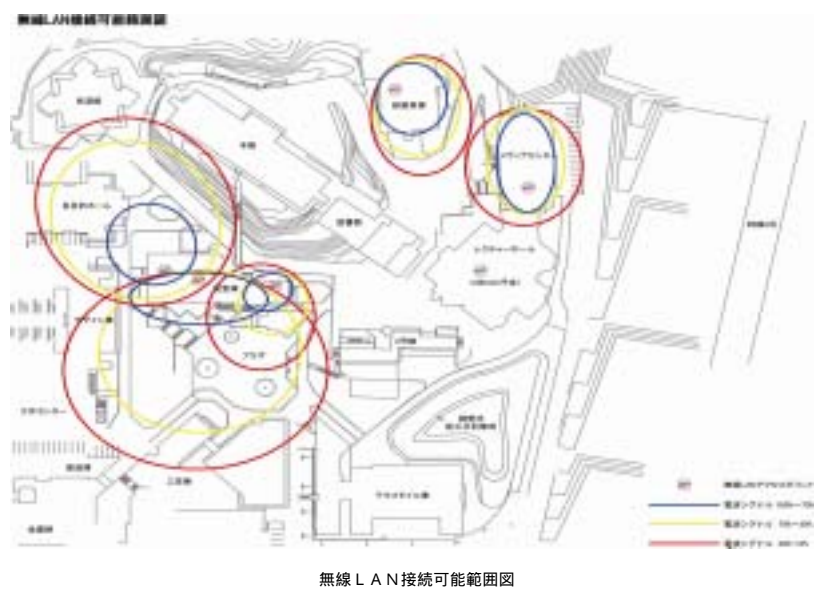
<WEB 環境等>

本学は、早くから光回線によるデータ処理を採用し、現在は下記の通りの光ケーブル基幹網が建物間を結んでいる。

また、学内には八王子、上野毛の両キャンパスで 28 台のサーバーが設置され、また、有線 LAN と無線 LAN が並行して設置され、各所でワイヤレスによるパソコン接続を可能にしている。

他にも、上野毛キャンパスと八王子キャンパスとはテレビ会議の設備を設け、頻繁に双方で同時

の会議をおこなっている。



無線LAN接続可能範囲図

6. 省エネ対策

< センサー制御による照明設備 >

デザイン棟、本部棟には、センサーによりその場の明るさに応じて調光できる照明システムを備えている。昼光を積極的に利用することであかりの無駄使いをなくし、省エネとコスト削減に効果がある。また自動的に照度を調節することで、快適な視環境をつくることができる。

その概要と効果: デザイン棟の各教室の窓側一列目照明には、あかりセンサーが取り付けられている。このセンサーは周囲の明るさを検知し、照明器具へ信号を送る。照明器具は、その信号により調光を制御し、昼光の変化にかかわらず室内の机上面照度を一定の明るさに保つことができる。また、調光していることが、見た目ではわからないように設計されているため、心理的影響はほとんどない。また、実際の測定結果では、昼光利用できる時間帯において、北側、南側教室共1列目の照明器具は連続的に25%調光で運用できることが判り、常に設計照度である約1,000lx以上(初期値)は確保されていたことが判明した。また、昼光利用できなくなる時間(夕方)でも一定照度制御がおこなわれており、教室利用者に対して心理的な影響はほとんどないと考えられる。この調査結果を元に、年間の電力量とCO2排出量比較を行なうと、従来の照明器具に比べて年間で約33%の電力を削減でき、またCO2排出量も112(kgC)削減できるという結果が判明した。同システムは照明学会照明普及賞(優秀施設賞)を1998年に受賞した。このシステムは、2007年竣工予定の新図書館、新校舎にも採用を計画している。



太陽熱利用温水設備（T A Uホール屋上）

< 太陽熱利用による温水設備 >

T A Uホールと彫刻棟には、太陽熱の利用による温水シャワー設備を備えている。通常の作業後の使用はもちろん、その他に緊急災害時の緊急避難場所として機能することを考慮している。



太陽光発電設備（T A Uホール屋上）

< 太陽光利用による発電設備 >

T A Uホールの屋上には、太陽光による発電設備を備えている。T A Uホールが緊急災害時の緊急避難場所としても使えるよう考慮し、停電になった場合でもT A Uホール内に最低限の電気を供給できるよう計画されている。



中水高架水槽（本部棟屋上）

< 雨水利用による中水設備 >

絵画北棟、工芸陶棟、デザイン棟、工作工房、テキスタイル棟、グリーンホール、メディアセンター、レクチャーホール、本部棟には、雨水利用による便所排水設備を設置している。これにより、屋上に降った雨水を地下の雨水層に貯めておき、棟内の便所排水を雨水から製造される中水によってまかなう。この設備の導入により、自然エネルギーである雨水を積極的に利用することで上水の

利用を少なくしコストの削減を行っている。また、常時地下に水を貯めることで非常事態発生時(大震災等)における水の確保にもなる。調査結果では、デザイン棟の便所は雨水だけでほぼまかなえることが明らかになった。



氷蓄熱槽（本部棟屋上）

<氷蓄熱による冷房設備>

メディアセンターには一部氷蓄熱システムによる冷房設備を導入している。蓄熱とは、熱を蓄えることで様々なエネルギーを熱に換え再利用する方法で、これを利用したのが蓄熱式空調システムである。電気は貯めておくことができないが、熱エネルギーに変換することにより効率的な利用ができる。この場合は、深夜電力を利用し蓄熱槽に氷を作り、昼間にその氷を使い冷房をおこなう。夜間の電力は、昼間に比べ割

安なのでコスト節約と発電所の消費電力のピークを避け CO2 排出量の削減に寄与している。



屋上緑化（本部棟屋上）

<屋上緑化による断熱>

レクチャーホール、本部棟の屋上には断熱対策として植栽を設置している。これにより最上階の断熱による冷暖房のエネルギーを削減するとともに、屋上の利用者にとって視覚的安らぎを与えている。第3期で計画される新校舎の屋上にも、断熱対策と景観をかねて植栽を設置する予定である。多摩丘陵の一隅に佇む八王子キャンパスも年を経て、外構や屋上に緑があふれ、地域の環境に同化するよう計画している。

7. 環境保全



筆洗缶

<排水の監視>

八王子キャンパスの大規模なキャンパス計画の推移とともに竣工した建物では、専門業者による全量回収(動植物油・鉱物油、有機溶剤、重金属などを含む溶液、その他有害物質を含む排水)を除いて、排水は全て公共下水道へ放流されている。環境問題に関心が高まっている時に大学として環境の保全、排水の監視に配慮するのは当然のことである。その対策を講ずるため研究室毎に使用薬品の種類・量および、その使用方法・処置方法の確認を行い、研究室で使用している対象物質毎の「製品安全データシート(MSDS)」ファイルを作成し、各アトリエからの排水について専門業者による測定を実施した。排水の改善策の一環として、油画のアトリエ(絵画北棟、絵画東棟)の約100教室に、油彩の制作時に絵筆を専用の缶の中で洗えるよう「筆洗缶」の配置を行った。この筆洗缶は、他の美術系の大学で使用されているものを参考にして本学で制作したものである。この缶は、20リットルほどの市販されているペール缶に細工し、下部に水を張り、絵筆を洗う部分に網を設け上部に灯油を張ったものである。現在は年2-3回程度、処理資格をもった専門の許可業者に引き取り回収を依頼している。その他のアトリエにおいても、有害物質排出の疑いのある建物については、中継柵等を設置して、定期的に専門の許可業者による汚泥の回収を行っている。教職員、学生、取引業者に有害物質及び広く環境問題に関する意識の高揚をはかり、全学あげて環境の保全排水の監視に取り組んでいる。

<廃棄物の処理>

キャンパスの各建物には、燃えるゴミ 燃えないゴミ(缶・ビン・ペットボトル)の専用ゴミ缶を配置している。缶、ビンについては、専用のコンテナを設けリサイクル業者に引き取りを依頼している。

美術大学なので石膏、金属、プラスチック等については、産業廃棄物として専用コンテナを設け専門の業者に回収を依頼している。木彫の作品制作に使用した木片の残りは、冬期にアトリエ内のストーブで薪として有効利用している。石の破材は一時ストックしておき、専門の業者に回収を依頼している。年間を通して、学部入学試験の前後、芸術祭終了後のゴミは膨大な量になり、その処置に苦慮している。現在は、業者に依頼して持出し処理を行っている。東京都や国の環境基準にあわせて、廃棄物の処理に対して前向きに取り組んでいる。

特に、各アトリエから排出される有毒な廃剤に関しては、T A Uホール北側に除外施設を設置埋設し危険物処理施設として機能している。今後、第3期工事では更に北側立体駐車場下部にも除外施設を建設予定でいる。

雨水排水に関しては、彫刻公園の下部と立体駐車場の北面下部に雨水抑制貯留層を埋設し、敷地内の大雨時の雨水処理に対応している。

< 八王子キャンパスの建設 >

- ・ 1997-2004 年に建設した延床面積の合計は 57,165.221 m²
- ・ 1997.03.15 絵画北棟 RC 造 地下1階・地上4階 2984.143 m² 延床 9843.664 m²
- ・ 1997.03.31 絵画北棟腐蝕室棟 S 造 平屋 140.406 m² 延床 139.191 m²
- ・ 1997.03.31 絵画北棟危険物倉庫 S 造 1F 8.798 m² 延床 8.798 m²
- ・ 1997.04.20 学生クラブ棟 RC 造 地上2階 466.528 m² 延床 708.722 m²
- ・ 1997.03.31 一号井ポンプ室 RC 造 B1F 0.000 m² 延床 77.850 m²
- ・ 1998.03.31 彫刻諸材料棟 RC 造 地下1階・地上3階 539.379 m² 延床 522.944 m²
- ・ 1998.03.31 彫刻金属棟 RC 造 地下1階・地上3階 576.240 m² 延床 566.190 m²
- ・ 1998.03.31 彫刻塑造・ギャラリー・鑄造・テラコッタ棟 RC 造 地下1階・地上3階 1233.904 m²
延床 3200.712 m²
- ・ 1998.03.31 工芸ガラス・金属・陶芸棟 RC 造 地上3階 2782.284 m² 延床 5909.53 m²
- ・ 1998.03.31 デザイン棟 RC 造 地上5階 2505.656 m² 延床 12231.877 m²
- ・ 1998.03.31 工作工房棟 RC 造 地下1階・地上1階 634.760 m² 延床 1207.553 m²
- ・ 1998.12.20 TAU ホール RC 造 平屋 1710.058 m² 延床 1694.678 m²
- ・ 1998.12.20 グリーンホール RC 造 地下1階・地上1階 1262.907 m² 延床 1525.157 m²
- ・ 1998.08.31 芸術学科棟改修 RC 造 地下1階・地上4階 398.325 m² 延床 1952.202 m²
- ・ 1999.03.31 テキスタイル棟 RC 造地下1階・地上3階 2103.485 m² 延床 4169.013 m²
- ・ 2000.10.31 メディアセンターRC 造地下1階・地上4階 1198.178 m² 延床 4914.54 m²
- ・ 2004.02.28 レクチャーホール RC 造地下1階・地上3階 2124.180 m² 延床 3301.250 m²
- ・ 2004.06.30 本部棟 RC 造 3階 2498.330 m² 延床 5191.350 m²

< 八王子キャンパス既存の建物 >

- ・ 1969.04.14 共通教育センター(旧本館) RC 造 B1F+4F 1711.825 m² 延床 7250.380 m²
- ・ 1972.01.17 体育館 RC 造 2F 971.464 m² 延床 886.784 m²
- ・ 1977.02.04 図書館 RC 造 B2F+4F 882.923 m² 延床 3019.843 m²
- ・ 1981.04.06 絵画東棟 RC 造 B3F+5F 2368.194 m² 延床 6179.381 m²
- ・ 1996.06.30 グランド一期 9657.000 m²

< 八王子キャンパスの土木工事 >

- ・ 1998.03.00 絵画棟周辺整備(擁壁・舗道路・市水・排水・電気幹線他)
- ・ 1997.12.00 一号井ポンプ室周辺整備
- ・ 1998.03.00 彫刻棟周辺整備(道路・市水・排水・電気幹線他)
- ・ 1998.04.00 デザイン棟周辺整備(中庭・道路・排水・電気幹線他)
- ・ 1998.05.00 工芸棟周辺整備(道路・擁壁・排水・電気幹線他)
- ・ 1998.05.00 テキスタイル棟周辺整備、修景池(造成・排水・電気幹線他)
- ・ 1998.08.31 テニスコート 2498.400 m²
- ・ 1998.10.31 グランド2期 9657.000 m²
- ・ 1998.12.00 グリーンホール周辺整備(橋・舗装・排水他)
- ・ 1998.12.00 TAU ホール周辺整備(舗装・排水他)

-
- ・ 1999.03.00 プラザ周辺整備（舗装・排水他）
 - ・ 1999.03.00 テキスタイル棟周辺整備（舗装・排水他）
 - ・ 1999.03.00 二号井ポンプ室周辺整備
 - ・ 1999.11.00 メディアセンター粗造成
 - ・ 2004.03.31 レクチャーホール周辺整備
 - ・ 2004.07.31 本部棟周辺整備
 - ・ 2004.10.30 正門周辺整備

8. 上野毛キャンパス



<上野毛キャンパス>



本館

本学は、法人本部と造形表現学部の置かれる上野毛キャンパスと美術学部並びに大学院の置かれる八王子キャンパスの二学部から成り立っている。

法人本部と造形表現学部の校地となる上野毛は、郊外住宅地開発のために 1929 年（昭和 4）大井町線が上野毛を通り二子玉川まで延長されたことにより、住宅地として発展した。そして、電鉄会社が旅客を増やす為の沿線開発事業として帝国美術学校を上野毛に誘致したことから始まる。

上野毛キャンパスは、戦災により校舎の一部を焼失してしまうが、本学建築科講師佐藤次夫の担当で、



中庭



2号館



3号館

他に数人の建築科OBが手伝って1954年（昭和29）4月に再建が完成した。

その後、講堂（1958年（昭和33））、本館（1960年（昭和35））、1号館（1962年（昭和37））、図書館（1964年（昭和39））、2号館（1966年（昭和41））が建設された。また、講堂は1964年（昭和39）の東京オリンピック開催にむけての環状8号線の道路拡幅計画によって、前庭の半分と講堂建物の一部（作品展示室、図書室）が削除されて現在の形となった。

1989年（平成元）には、わが国では初めて夜間に美術教育を行う美術学部二部を上野毛キャンパスに開設した。この開設にともない、1989年（平成元）に映像・演劇の教育を行えるスタジオや最新のコンピュータ教育環境を整備した3号館を建設した。

1997年（平成9）から始まった八王子キャンパス整備計画の最中に、上野毛でも美術学部二部を造形表現学部として改組をおこない、社会人を中心とした昼夜間制の学部として各学科の充実に力を入れてきた。その間に、法人本部の建物の改装や教室の冷房化が順次行おこなわれ、業務及び授業環境も大幅に改善された。冷房化に関しては、公開講座が本格化してきた2001年（平成13）に講堂を行ったのを最初に、翌年には2号館とB棟、2004年に3号館の一部とA棟を行ない、キャンパス内に全て冷房が設置された。

また、上野毛キャンパスでは社

会人教育の一環として生涯学習に力を入れているが、この人気とともに施設の不足も目立ってきている。

本学は、今後も上野毛と八王子との双方で一つの大学を形成していく。学部や学科の構成が、双方の連携を更に強め双方に不足するものをお互いが補完するかたちで進めるためにも、八王子キャンパスの施設計画第三期の終了に引き続き、少子化に向け、次の時代を見通した更なる改組と上野毛のキャンパスの整備計画を検討中である。

<上野毛キャンパスの改修工事>

- ・ 1998.10.00 1号館改修 デザイン学科他
- ・ 1998.10.00 本館改修 共通教育
- ・ 1998.10.00 A棟改修 映像演劇学科
- ・ 1998.10.00 B棟改修 映像演劇学科
- ・ 1998.10.00 2号館改修 造形学科他
- ・ 1999.05.00 1号館・本館・2号館改修
- ・ 1999.05.00 上野毛校舎、本館及び1号館3階改修 法人本部
- ・ 1999.05.00 上野毛校舎本館玄関ホール壁面改修
- ・ 2001.04.00 講堂冷房改修
- ・ 2002.05.00 2号館・B棟冷房改修
- ・ 2004.08.00 3号館・A棟冷房改修

9. 附属施設

<富士山麓セミナーハウス（純林苑）>



山中純林苑

富士山麓セミナーハウス（純林苑）は、学生の教育活動並びに研究、研修を行う目的として 1966 年（昭和 41）に山梨県山中湖村に設置された。セミナーハウスの周辺は、国立公園特別指定区となっており、世界に類をみないハリモミ純林の貴重な森林となっている。

<奈良古美術セミナーハウス（飛鳥寮）>



奈良飛鳥寮

奈良古美術セミナーハウス（飛鳥寮）は、奈良、京都のわが国古美術の鑑賞並びに研究の便宜をはかるため 1965 年（昭和 40）に奈良市窪之庄に設置された。現在も古美術研修の拠点として多くの学生に利用されている。

<多摩美術大学美術館>



多摩美術大学美術館

美術館は、1990 年（平成 2）に東京都多摩市に建築された「東京国際美術館」を改装し、八王子キャンパスに設置されていた「多摩美術大学附属美術館」が 2000 年（平成 12）4 月に移転して、「多摩美術大学美術館」として開館した。

美術館では、本学が所有している世界の古美術品、絵画、写真などの収蔵品数百点を定期的に入れ替えて常設展示するほか、年に数回の企画展を開催している。

また、学生の教育の場にするだけでなく、生涯学習講座等を通して広く地域、社会に開放している。